

埼玉県指定出資法人あり方検討委員会事前ヒアリング  
Bグループ（公財）埼玉県産業文化センター 議事概要

1 開催日時 令和6年10月3日（木）14時50分～15時18分

2 開催方法 オンライン会議

3 出席者

（1）委員 伊藤（麻）委員、鎌田委員、藤田委員

（2）県 ・事務局 行政・デジタル改革課 秋穂主幹、新井主査  
・法人所管課 産業労働政策課 橋本副課長、島田主幹

（3）法人 （公財）埼玉県産業文化センター 松山専務理事、川村総務企画部長、  
沼野営業推進部部長代理

4 ヒアリング内容

（委員）

営業は年間でどれくらい必要になるのか。それとも状況を見ながら少しずつ営業をしていくといった形か。

（法人）

どちらかというと後者に近い。空きが出たときにタイムリーに営業を行い、それによって全体を埋めていく営業方法が主である。

（委員）

例えば、理想としてこのようなカラーにしたいという考えはあるか。それともとりあえず入ってくれば良いと考えるのか。

（法人）

我々が理想とするのは、一流のアーティストが入ってくることと同時に、パブリックなホールとして地域の子供たちの発表会などもコンスタントに行うことができることである。どのようなものでも行うことができるということが最も理想的であり、なかなか実現は難しいが、様々なものを受け入れることを第一に考えている。

（委員）

より地域の人々の利用を促すために、例えば年に3・4回、アニメや演歌、オーケストラなどそれぞれの分野の一流のアーティストが立ったステージと同じステージに立つという認識を、県民や地域の人々に持ってもらうための動きについて、今後検討する予定はあるか。

（法人）

主催事業の1つである高校生のダンスイベントでは、一流のダンサーをゲストとして迎えることで、同じステージに立つ機会を提供している。プロとアマチュアと一緒に立つことのできるステージの提供はそれぞれのスケジュールの都合上難しいところはあるが、これまでも少ないながらこのような試みを行ってきた。また、利用者に対しても、一流のアーティストが立ったステージと同じステージに立つことができる機会があるということを、営業活動の中で伝えている。

（委員）

古い方法かもしれないが、埼玉県にゆかりのあるアーティストに手紙を送り続けるなどしてコネクションを生み出すことなどが必要と考えている。一方で、行政の財務状況が悪化したときに最初にカットされやすいのは文化芸術となる傾向がある。しかし、文化芸術がなくなると発想力や人間の形

成・育成が薄いものになってしまうため、このバランスが非常に重要である。県と繋がりのあるアーティストとのコネクションを上手く見出しながら営業活動を行うことで、より一層の活性化が期待できると感じている。

(法人)

委員指摘のとおり、地元のアーティストと同じステージに立つことももちろん大切だが、様々な一流のアーティストが集まり、県民に一流のエンターテインメントを提供することも重要である。大ホールの利用率は現在9割近くまで回復しているが、委員からの意見を受け入れつつ、これら両方を実現するために、今後も埼玉らしさや県民が喜ぶものを提供できるよう欲張りに頑張っていきたい。

(委員)

事前質問の中で同様のホールを持つ埼玉県芸術文化振興財団との統合については簡単ではないとの回答があったが、何か融合するようなアイデアはないか。絶対そうすべきだというわけではないが、これから人口減少が進む中で効率化できる方法があればと思ったが、何かイメージはあるか。

(法人)

基本的に文化事業は、芸術性といったアートの部分と娯楽性といったエンターテインメントの部分の組み合わせで成り立っている。我々が志向するのは芸術性と娯楽性どちらも高いものであるからこそ、多くの人に楽しんでもらっている。この後に行われる埼玉県芸術文化振興財団の事前ヒアリングでどのような回答があるかは分からないが、どちらかという埼玉県芸術文化振興財団は芸術性に力を入れるような公演を行っている。典型的なものとして演劇が挙げられる。演劇はあまり客を入れられないといったところがあるため、我々が持つ2,500席のホールではほぼ行っていないが、埼玉県芸術文化振興財団では事業の中心の1つとして演劇があるなど、かなりの違いがある。クラシック音楽に関しても、我々の持つホールでは娯楽性の高いものを、埼玉県芸術文化振興財団では芸術性の高いものを行うという棲み分けができており、その結果、効率的に運営できていることは事実である。今後は県民にとって何が最善であるかを考え、さいたまアリーナなどともコラボレーションしながら進めていくべきと考えている。これまでその視点が欠けていたことは事実である。

(委員)

立地的にも利便性が高く、収容人数も多いため、様々なことにチャレンジしていくのがよいのではと思う。例えば国際化が進む中で、県民と海外のアーティストとの接点を増やし、若者が海外を見ながら日本を再認識するようなきっかけ作りを、芸術や音楽を通じて行うことができると思う。今後の動きに期待している。

(委員)

経費関係、特に支払に関して確認したい。ビル貸出管理事業における管理の委託について、委託先がすでに決まっているということは理解したが、その金額が合理的かどうか、特有の状況を踏まえた上でどのように判断しているか、考え方を教えてほしい。

(法人)

事前質問を受けてビル内の民間事業者の状況を調査したところ、清掃の平米単価が民間事業者より何割か安い金額となっていた。そのため、結果としてはあるが、適正かつ比較的安い金額で契約ができていると考えている。

(委員)

そのような比較調査は、基本的に交渉段階で事前確認を行うべきと考える。また、駐車場管理事業についても委託があるが、大宮ソニックシティに委託しているということでもいいか。

(法人)

駐車場は2つあり、ビルの地下駐車場は建物の持ち主である日本生命保険相互会社と管理会社である大宮ソニックシティ株式会社、センターの3社で契約している。第2パーキングは少し離れた場所にあり、埼玉県の普通財産を借り受けて、センターと大宮ソニックシティ株式会社の2社で契約している。地下駐車場には持ち主として日本生命保険相互会社が入っているため、第2パーキングとまと

めて委託ができず、それぞれで契約をしている。

(委員)

その場合、契約金額の合理性はどのように検討しているか。

(法人)

大宮ソニックシティ株式会社はビル全体の管理会社であり、ビルの特性を理解した上での管理を行っているため、先ほどの清掃会社や、あるいは警備会社といった観点での比較は難しいと判断している。事後調査についてもできないことはないが、日本生命保険相互会社との関係性からの難しさがあり、現状そこまでの詳細な調査の必要性も感じていない。

(委員)

ホール管理事業の委託については指名競争入札が行われているが、ビル貸出管理事業の委託との比較といった観点ではどうか。この比較により契約単価が妥当かどうかの確認にもなるかと思ったところだが。

(法人)

ホールの設備について、現在は指名競争入札を実施し、過去の委託先事業者とは異なる事業者に委託を行っている。入札の結果として、金額を下げる事ができたと考えている。

(委員)

ビル貸出管理事業の委託についても、場合によっては見直しが可能であり、費用の削減の余地があるという認識でよいか。

(法人)

ビルとホールは同じ施設ではあるが、管理の方法が異なるため、一概に見直しが可能と言うことはできない。ホールは特殊性があるため指名競争入札に至っている。ビルは通常のオフィスビルと比較できることがあり、もう少し単価などについて比較検討する必要があったと感じている。

(委員)

今後の検討に活かしてもらえればと思う。また、ホール管理事業における利用料金について、一部無料とすることや一部負担にすることができるとのことだが、その場合の基準やセンターの負担について教えてほしい。

(法人)

基本的に我々が主催するものについては、割引くというよりも、我々が負担するという形で事業を行っている。県からの指定管理事業では、いくつかの事業を県などと協力して実施するという事を約束している。その中で、例えば施設使用料は我々が負担して、主催者側の負担をゼロにする、あるいは一部を負担してもらおうといった協定を個別に締結している。我々にとってもメリットがある中で、事業費をどこまで負担するかということを決めている。

(委員)

その負担の基準について明確なものはあるか。

(法人)

明確な基準はない。ただし、我々が施設料を負担するという形がほとんどである。

(委員)

単純に見ると、埼玉県芸術文化振興財団と同様の事業を行っているように思えてしまうため、それであれば統合して効率的な運営ができないかと思ったが、所有関係が独特であり、設立の趣旨や目的を細かく見ていくと、それぞれ異なるものであるということを理解した。そのようなことから無理に統合するのは得策ではないとも感じたが、いかに効率的に運営をしていくかが求められるため、常に検証しながら事業を進めていってほしい。埼玉県芸術文化振興財団はより芸術性に重きを置く一方、

埼玉県産業文化センターは娯楽性や大衆性、また産業振興といった面も加わってくる。類似団体との連携はもちろん重要だが、むしろ棲み分けの関係を明確にし、対外的にわかりやすく示すことで独自の価値が強調できると考えている。もちろん重なる部分もあると思う。例えば、公立学校の発表の場として、埼玉会館が埋まっていれば他の施設を利用するなど、厳密に分けることは難しい。しかし、自分たちの法人がどこに力を入れているのか、どのような強みを持っているのかを明確に示すことで、同じような団体があるといったイメージを外部から持たれることは避けられると感じた。

(法人)

エンターテインメント性に関しては、より多くの人を集めるために会員制や友の会制度を導入し、できるだけ広い範囲のアーティストの公演を紹介して、チケットを安く提供するなどの事業を行っている。ソニックシティはエンターテインメントとアートの融合に関して上手くいっているという自負があり、我々からするとアートの部分は強調していない部分は実際にあるが、傍から見ると例えばクラシックや落語などの重なっている部分がある。アートとエンターテインメントをはっきりと棲み分けするのは難しく、当然ながら両方高いものがあるといいものになる。埼玉県芸術文化振興財団でも両方高いものを目指しているはずである。それでもアートを前面に立てる埼玉県芸術文化振興財団と、エンターテインメントを立てる我々との違いをどう表現するかということについて、実際に提供するプログラムで判断できるのではと考えている。例えば埼玉県芸術文化振興財団がロックアーティストの公演を行うことは恐らくなく、またソニックシティでリア王を上演することも恐らくない。このような違いを強調し、ソニックシティはこうだというような形を出していけると、棲み分けがより分かりやすくなるのではと感じる。